

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	真志田 祐理子
主論文題名： 多様なケア環境での老年看護実践に関する研究				
(内容の要旨)				
【第1章 序論】				
<p>本章では、多様なケア環境で高齢者への看護の質の維持・向上の必要性が生じた背景を整理し、本論文の全体像を説明する。</p> <p>超高齢社会の到来とともに老年看護の需要が高まり、老人専門看護師などの高度実践看護師の数も増えてきた。しかし、多くの看護職はジェネラリストとして高齢者ケアに携わっており、高齢者の状態像の把握の複雑さから高齢者への看護に困難さを抱くことは多い。様々な健康状態にある高齢者が生活の質を低下させることなく生活を継続させるためには、切れ目のない支援体制を整備するとともにそれぞれのケア環境において高齢者の特性を踏まえた看護実践能力を高める必要がある。そこで本論文では、入院・治療、外来通院、高齢者向け住まいの3つのケア環境に焦点を当て、それぞれの場における高齢者のニーズと求められる看護を明らかにし、多様なケア環境で求められる老年看護の課題を考察する。</p>				
【第2章 急性期病棟でクリニカルパスを使用する中で実践される老年看護】				
<p>医療技術の進歩とともに手術を受ける高齢者が増加し、急性期病院では急性期看護の専門知識と高齢者の特性を踏まえた老年看護の融合が推進されるようになってきた。本章では、入院・治療の場の一つである消化器外科病棟で普及するクリニカルパスの高齢者への使用に着目し、看護師がクリニカルパスを使用する中で高齢者の特性を踏まえて行う看護実践の特徴について、質的内容分析を用いて明らかにした。その結果、看護師はクリニカルパスによる高齢者の特性を踏まえた看護実践の困難さを感じ、一部の看護師はクリニカルパスにとらわれず経験に基づいた臨床判断を重視し看護を行っていることが明らかとなった。しかし、経験の浅い看護師や高齢者への関心が低い看護師では多忙な業務の中で高齢者の特性を踏まえた看護実践を行うことに消極的になる人もおり、看護師個人の経験や努力だけで高齢者の特性を踏まえた看護実践を行うことに限界が生じる可能性が示唆された。急性期病院での老年看護の専門性を高めるための組織的な教育や高齢者の特性を踏まえたツール開発が求められる。</p>				

【第3章 大腸切除術後に老いを生きる後期高齢者の生活の変化とその対応】

本章では、急性期治療を終え外来通院をしながら自宅で生活を送る高齢者に焦点を当てる。食・排泄、移動に影響を受けやすい大腸切除術を受けた高齢者の長期的な生活体験に着目し、術後の回復を辿る中での高齢者の生活の変化とその対応について質的内容分析を用いて明らかにした。その結果、高齢者は特に回復・適応の時期に入ると、手術の影響だけではなく老化や併存疾患の状況、周囲のサポート状況などが生活の変化に影響し、成人よりも多様な生活の変化を認識し、その対応にも多様性があることが示唆された。また術後の経過が順調に見える高齢者であっても何らかの生活の変化が生じ、自ら情報収集し変化に適応する高齢者や、医療者に頼れず一人でもがく高齢者もいた。生活上の課題や葛藤は短時間の診療場面では高齢者自身から語られにくい。外来の場では高齢者が語らない背景にある状況を予測しながら、身体的変化だけでなく心理、社会、スピリチュアルな側面も含め生活全体を多面的に捉える視点が重要となる。個々の高齢者の特徴や理解度に応じて有益な情報提供ができる多面的な支援体制を構築する必要性が示唆された。

【第4章 高齢者向け住まい入居者が利用する訪問看護サービスの特徴】

本章では近年急増する高齢者向け住まいに焦点を当てる。近年、高齢者向け住まいでは多様な健康レベルに応じたヘルスケアニーズへの対応が求められるようになり、訪問看護サービスの利用ニーズが高まってきた。効果的な支援を検討するためには利用ニーズに応じた対策を検討する必要があるが、わが国の高齢者向け住まいで提供される訪問看護サービスの特徴についてはあまり言及されてこなかった。そこで潜在クラス分析を用いて探索的にサービスを類型化し、高齢者向け住まいでの訪問看護の利用ニーズを検討した。訪問看護サービスの提供タイプは、End-of-life ケア、疾病管理、要介護者のケア、リハビリテーションケア、フォローアップケアの5つに分類され、高齢者向け住まいでの高齢者ケアの課題を訪問看護により補強している現状が示唆された。

【第5章 総括】

本章では論文全体の考察を行い、今後の課題と展望を述べる。3つのケア環境を通して高齢者のニーズに対応する看護の実態を明らかにした。病院看護では高齢者の非定型的で多様な特性に対応する努力がみられたが、高齢者のニーズに対応しきれず潜在化するニーズを見落としやすい現状が明らかとなった。高齢者向け住まいでは訪問看護の活用が多様なヘルスケアニーズへの対応に寄与していた。多様な場での Age-Friendly Care の実践に向け、高齢者の特性理解や支援の基盤となる老年看護の知識・技術の浸透、老年学と各専門領域の協働推進、各ケア環境での課題解決を図る体制整備が求められる。